

栃木県埋蔵文化財 センターだより

発行 平成21年11月13日
栃木県教育委員会
宇都宮市埜田1-1-20
TEL 028-623-3425
編集 (財)とちぎ生涯学習文化財団
埋蔵文化財センター
下野市紫474
TEL 0285-44-8441
FAX 0285-44-8445
URL <http://www.maibun.or.jp>

2009
11月
やま
か
い
ど
う



CONTENTS

- 市町教育委員会が実施する整理作業から
・薬師寺稻荷台遺跡（下野市）
新道平遺跡（那須烏山市）唐沢山城跡（佐野市）
- 埋蔵文化財センターが実施する整理作業から
・川戸金八幡遺跡（日光市）下陰遺跡（真岡市）
- 市町教育委員会が実施する発掘調査から
・真岡城跡（真岡市）岡本城跡（宇都宮市）
- 埋蔵文化財センターが実施する発掘調査から
・西刑部西原遺跡（宇都宮市）
上金枝Ⅰ・Ⅱ遺跡（さくら市）
- 特集 縄文時代の動物
- 埋蔵文化財活用のための基礎講座
- 埋蔵文化財センター普及事業の紹介

市町教育委員会が実施する整理作業から

1. 復元された 11,000 年前の土器・薬師寺稻荷台遺跡（下野市）

薬師寺稻荷台遺跡は、田川の低地を見渡すことのできる小高い丘の上に所在しています。調査の結果、縄文時代の土坑や古墳～平安時代の堅穴建物跡7軒、方墳1基などが確認されたほか、出土例の少ない縄文時代草創期の爪形文土器が出土しました。

現在、出土した遺物の整理作業を実施しています。その結果、爪形文土器は口縁部を欠損していますが、底部から胴部の約2/3が残っていたため、復元することができました。この土器は、栃木県内で復元できた爪形文土器としては最初の例となります。また、この土器の炭素による年代測定を実施したところ、今から約11,000年前のものであることが確認されました。草創期の土坑からは、土器の他に石核（石器の素材となる剥片を剥がすために用いた石の塊）などの石器が約10点確認されました。石核は、爪形文土器の中に納められていたと考えられます。これらのことから、この土坑はお墓の可能性もあると考えられます。

今回の調査では、縄文時代草創期の土坑が合計3基確認されましたが、残念ながらほかの2基からは何も出土しませんでした。しかし、この丘の上にはこれらの土坑以外にも、縄文時代草創期の人々の生活した痕跡が、まだ多数残っていると考えられます。

（下野市教育委員会 0285-52-1120）



爪形文土器出土状態



復元された爪形文土器

2. 縄文土器の復元進む・新道平遺跡（那須烏山市）

新道平遺跡は、那須烏山市の北部、江川左岸の喜連川丘陵上に立地しています。調査は、民間工場造成事業に伴うもので、平成5年度、平成18～20年度の2回にわたる調査を実施しました。この2回の調査で、縄文時代中期後半の竪穴住居跡約120軒、貯蔵用の土坑など700基以上を確認しました。

また、奈良・平安時代の東山道駅路と考えられる道路の硬化面が確認され、遺跡内を通過していることもわかりました。

遺物は、縄文時代前期や中期の土器、打製石斧や磨製石斧などの石器、土製耳飾や硬玉製大珠などがミカン箱大のコンテナで約400箱出土しました。

現在は、これらの出土品の水洗いが終了し、土器の接合作業と2,000枚にも及ぶ遺構実測図の整理を実施しています。

これら出土品の中には赤く彩色された埴形土器や高さ60cmを越える大型の深鉢形土器、栗と考えられる炭化物が確認され、新道平に居住していた人々の生活を垣間見ることができる情報を得ています。

（那須烏山市教育委員会 0287-88-6223）



復元された縄文土器



土器の復元作業

3. 海の貝が出土・唐沢山城跡（佐野市）

戦国時代の城である唐沢山城跡から、発掘調査で貝殻が発見されました。山麓の根小屋地区からの出土で、2点は大沢口の1号土塁基底部から、もう2点は隼人屋敷遺物包含層からです。出土した時は保存状況が悪く、種類も不明でした。埋蔵文化財センターの指導により保存処理を行い、栃木県立博物館で調べてもらったところ、いずれも海洋性の貝であることが分かりました。種類は、アカニシ2点、サザエの一種1点、二枚貝（アサリやハマグリ仲間）1点で、いずれも関東地方近海で採れ、食用になるものです。

内陸の城跡から海洋性の貝が出土することは意外に多く、群馬県富岡市宮崎城跡や長野県松本城跡などからも出土しています。特に松本城跡では、唐沢山城跡出土貝と同様の貝類が550点も出土しており、領主たちが食用にしたと考えられています。

当時、これらの貝をどんな手段で運び、どのように調理したのか不明な点も多いのですが、普段は入手できない海洋性の貝類は特別のご馳走だったのかもしれませんが。

（佐野市教育委員会 0283-86-3495）



アカニシの出土状況（隼人屋敷）



出土した海洋性の貝類
（中央上・左アカニシ、右サザエ、中央下二枚貝）

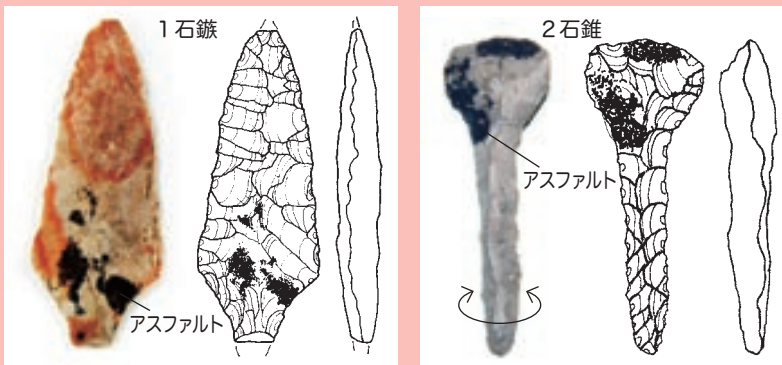
埋蔵文化財センターが実施する整理作業から

4. アスファルトの付着した石器・川戸釜八幡遺跡（日光市）^{かわどかまはちまん}

川戸釜八幡遺跡は日光市の最奥部、湯西川ダム建設に先だって発掘調査が実施されました。この遺跡からは、縄文時代後期から晩期の竪穴住居跡 20 軒や墓 20 基、多量の土器や石器も出土しました。今回紹介するのは「アスファルトが付着した石器」2点です。1点は石鏃^{せきざく}、もう1点は石錐^{せきすい}（石のきり）です。天然アスファルトは、地表に漏れ出した原油から採取されます。強い粘着力^{ねんちやくりよく}をもつため、割れた縄文土器^{ほしゅう}の補修^{せつちやくざい}などの接着剤として古くから利用されました。

1の石鏃は先端部と茎部が欠けていますが、長さ3.3cm、幅2.3cm、厚さ0.5cmの大きさです。アスファルトは下位の茎部付近に付着していますから、矢柄に石鏃を固定するために使われたと考えられます。2の石錐は長さ3.6cm、幅1.4cm、厚さ0.6cmです。石錐は手持ちで回転させて皮などに穴をあける石器と考えられますが、この錐は手で持つ部分にアスファルトが付着しています。このため木などで作られた柄^えがアスファルトで固定されていたかもしれません。

天然アスファルトの産地は新潟県、秋田県などの日本海側の油田地帯が知られており、栃木



アスファルトが付着した石鏃と石錐

県内では産出しません。このため、これらのアスファルトは日本海側の人々との交流により手に入れたものと考えられます。大関利之氏の研究（「那珂川中流域におけるアスファルト付着石鏃」野州考古学論攷・2009）によれば、栃木県内において、アスファルトの付着した石鏃は、川戸釜八幡遺跡を含め、9遺跡で確認されています。

5. お茶を楽しむ・下陰遺跡（真岡市）^{しもかげ}

下陰遺跡は栃木県真岡市に所在します。真岡市街地から南に続く台地^{ごぎょうがわ}が五行川に向かって落ちる緩斜面に広がっています。標高は約56～58mです。北関東自動車道建設に伴い平成13・14・17・18年度に発掘調査（総面積41,000㎡）が行われました。整理・報告書作成作業は、平成14年度から断続的に平成21年度末まで実施する予定です。

縄文時代から近世までの遺構・遺物が確認されていますが、中心となる時代は中世です。遺跡全体が溝によって幾重にも区画されていること、調査区に接して八木岡城跡があること、調査区付近に「東館」「市」「市場」等の字名が残っていること等から城・館・市の機能が一体になった遺跡と考えられます。

なかでも特徴的なのは、中国産陶磁器（青磁・白磁など）や瀬戸・美濃地方産天目茶碗が数多く出土している点です。下陰遺跡に住んだ有力者は、これらの焼き物を使って、喫茶を楽しんでいたと思われます。



中国産青磁碗など



天目茶碗

市町教育委員会が実施した発掘調査から

6. 築城の工法を確認・もおかじょうあと真岡城跡（真岡市）

真岡城は芳賀氏の居城であり、真岡小学校が建つ五行川右岸の独立丘陵上に立地します。築城年代は1362年、1532年、1577年の三説があるほか、1362年を築城、1577年を改築とする説があります。

今回の発掘調査は小学校のプール建設に伴うものであり、南曲輪の西部を発掘しています。調査の結果、この部分は本来、西に向かって傾斜する地形ですが、築城の際に土を盛って造成していることがわかっています。また、一旦表土を削平した後に盛り土をして整地をしていることも確認されています。

真岡城に関する遺構としては、溝1条、柱穴などの小穴多数が見つかっています。溝は曲輪内を区画する東西方向の溝で、上面で幅3m、深さは1.5mあります。溝は途中2箇所途切れており、この部分が通路となります。この溝の北側で掘立柱建物跡を最低2時期分2棟確認しています。このほかの柱穴は塀の可能性のあるものもあります。これらの遺構は、出土遺物から16世紀代であると考えられます。

（真岡市教育委員会 0285-83-7731）



掘立柱建物跡（南から）



曲輪内を区画する溝（西から）

7. 宇都宮氏の北の守り・おかもとじょうあと岡本城跡（宇都宮市）

岡本城跡は、宇都宮市中岡本町城ノ内に所在する中世の平山城です。昭和45年に当時の河内町が町の史跡に指定し、平成19年の市町合併により宇都宮市指定史跡となりました。今回の調査は、城跡の現況把握と範囲確認のために行ったものです。

この城は、宇都宮氏の北の守りとして岡本富高が築いたと伝えられています。一方、寛正3年（1462）に玉生氏が築いたとする説もあります。

今回の調査では次の4点が判明しました。①主郭部分の堀の規模が幅11～15m、深さ6m以上であり、外側にも低い土塁が廻っていた可能性あること。②主郭部分は現状で見られる土橋ではなく木橋の可能性があり、虎口内側の区画溝内から16世紀のカワラケが出土していること。③北崖下にも幅5～7mの堀と土塁が廻っていること。④幅約10m、深さ約1.5mの二の堀が確認され、堀の埋土中から16世紀のカワラケが出土していること。以上の調査結果から、戦国期の岡本城の様子が一部解明できました。

（宇都宮市教育委員会 028-632-2764）



岡本城跡遠景（南から）



虎口内側区画溝確認状況（南西から）

埋蔵文化財センターが実施する発掘調査から

8. インターパークの大集落・^{にしおさかべにしはら}西刑部西原遺跡（宇都宮市）

西刑部西原遺跡は、宇都宮市から上三川町に広がる非常に大きな遺跡です。これまで「インターパーク宇都宮南」の開発に伴い、当埋蔵文化財センターや宇都宮市教育委員会によって幾度となく発掘調査が行われ、極めて重要な成果が得られています。

今回の調査は、インターパーク東側の^{すなだかいどう}県道二宮宇都宮線、通称砂田街道の拡幅工事に先立つもので、平成21年5～7月までの3ヶ月間にわたり、約900㎡の範囲を行いました。発見された遺構には^{すなだかいどう}堅穴住居跡18軒、円形周溝遺構2基、井戸跡2基、掘立柱建物跡1棟、溝跡1条、土坑25基などがあり、その大半が古墳時代に該当します。

特に今回は、一辺の長さが8mを超える大型の堅穴住居跡の発見が相次ぎ、これらには馬蹄形に盛り上がる入口施設や張り出しピット、間仕切り溝などが伴っています。さらに、調査区内を直線的に横切る幅1mほどの溝跡からは、当時の祭りの道具である石製模造品十数点がまとまって出土しています。区画溝と考えられるこの溝跡の近くには、掘立柱建物跡が同一方向で位置しており、豪族居館が存在する可能性も否定できません。



発掘調査の様子（北から）



古墳時代の堅穴住居跡の調査（北から）

9. 中世の道と水路・^{かみかなえだいち}上金枝 I・II 遺跡（さくら市）

中世、宇都宮氏と那須氏は、喜連川の地を舞台に合戦を繰り広げていました。それは古代から主要道が通り、^{あらかわ}荒川・^{うちかわ}内川が合流する水陸交通の要所だったからです。

^{えがわ}上金枝 I・II 遺跡は、江川の西、喜連川城下から北東の丘陵を越えた^{ふくほら}福原・^{さくやま}佐久山方面の途中にあります。

^{くわい}上金枝 I 遺跡からは、掘立柱建物跡1棟・掘立柱塀1列・井戸1基・溝8条・長方形土坑11基・地下式坑1基・墓1基・土坑155基・道路跡1条が、^{ちか}上金枝 II 遺跡からは、溝1条・井戸1基・土坑31基が見つかりました。

^{こんせき}上金枝 I 遺跡から見つかった溝は、水の流れた^{せき}痕跡や、複数の溝の合流部に堰とみられる施設があることから水路と考えられます。溝からは、中世陶器や北宋銭・馬の歯が出土し、墓からも北宋銭が出土するため、この遺跡は中世に営まれた村の端部と見られます。

明治時代の地図には遺跡の位置に道路があり、遺跡から見つかった道路跡がそれであると見られます。先ほどの水路も同じ方位を向き、道路跡と重ならないので、道路跡も中世に^{さかのぼ}遡る可能性があります。もしかしたら、中世の武将が^{くつわ}轡を並べて通った道だったかも知れません。



調査区全景（南東から）



出土した馬の歯

縄文時代の動物

-栃木県内の発掘調査資料から-

縄文時代の動物について具体は腐ってしましますが、貝塚や洞片でも動物の種類はもちろん、部ギなどの中小型の動物の獣骨のまた、土器に付けられた動物のしかし、対象となる動物を著しく

【イノシシとシカ】

イノシシとシカが縄文時代の重要な食料であったことは、遺跡からこれらの骨や角が最も多く出土していることから明らかです。

益子町御霊前遺跡では、晩期（約 2,800 年前）の竪穴住居跡から焼かれて割れたりゆがんだりしたイノシシとシカの骨がたくさん出土しました。火を受けた土偶や石剣などと一緒に出土していることから、火を使った豊猟に感謝する儀礼が行われたと考えられます。また、藤岡町藤岡神社遺跡では、頭頂部に打撃による陥没・破碎が認められる頭骨が出土しています。



1 火を受けた獣骨と土偶・石剣
(御霊前遺跡)



2 打撃痕のあるイノシシ頭骨
(藤岡神社遺跡)

イノシシは、一度に数頭の仔を生み生命力が強いことから豊猟や繁栄の象徴として、土器の突起として付けたり、土製品が作られました。

土器の口縁部にイノシシの獣面突起を付けたものは、前期後半（約 5,200 年前）に西関東から中部地方で流行します。群馬県安中市中野谷松原遺跡では 122 個の獣面が出土しました。栃木県では、県南西部を中心に 5 遺跡から 8 点出土しています。

後期（約 3,000 年前）には、簡素な作りの動物形土製品が多く作られます。ずんぐりした形のものはいノシシでしょうか。なお、シカの土製品は角の表現が難しいためか、ほとんど作られませんでした。



3 イノシシの顔の付いた土器（群馬県中野谷松原遺跡）



a 日光市立三依小学校敷地内遺跡



b 佐野市立田沼西中学校所蔵品

4 栃木県内の獣面突起



5 動物形土製品（藤岡神社遺跡）

【イヌ】



6 埋葬されたイヌの頭骨
(藤岡神社遺跡)



7 イヌ形土製品（藤岡神社遺跡）

的に知ることができるのは、遺跡から発掘された骨や角などの動物遺体です。こうした骨や角はふつうの遺跡で窟遺跡などの特殊な環境や火で焼かれた場合は、残っていることもあります。これらの骨を分析すると、小さな破位や年齢など多くの情報を得ることができます。栃木県では、イノシシ・シカ・イヌ・オオヤマネコ（絶滅）・ノウサヒほか、キジ科・カモ科・ワシタカ科の鳥類、コイ・ナマズ・ウナギ・ギギなどの魚の骨が確認されています。頭部をかたどった突起や土器に描かれた文様、動物形土製品なども縄文人と動物との関わりをよく示しています。変形し、省略して表現しているものも多く、その種類を特定するのが難しいものも少なくありません。

今日、イヌは日本で最も多く飼われているペットですが、人とイヌとのつきあいは、縄文時代早期（約8,500年前）まで遡ることができます。狩猟が盛んになる後期から晩期には丁寧に埋葬された例が多いことから、番犬や猟犬として飼われていたと考えられています。



8 復元された縄文犬「藤丸」

藤岡神社遺跡からは、縄文時代後期（約3,000年前）の土器や石鏃と一緒に埋葬されたイヌの頭骨が発見されました。また、口を開け、前足を踏ん張り、耳と尾を立てイヌの吠えている姿を忠実に表現したイヌ形土製品も出土しました。

この土製品を参考に、頭骨の分析から樹脂で復元されたのが「藤丸」です。年齢は2歳、体高（肩までの高さ）は37cmで柴犬ぐらいの大きさです。オオカミに似て額から鼻にかけてのくぼみが不明瞭で、四肢（手足）は太く短いのが特徴です。

【ヘビ】

ヘビやカエルなどは虫類や両生類は脱皮や変態をするため、神秘的な力が宿っていると考えられていました。

芳賀町弁天池遺跡出土の土器は縄文時代中期（約4,500年前）のもので、口の所にヘビと思われる突起が付けられています。甲信地方から持ち込まれた土器と考えられています。



9 ヘビの装飾のある土器（弁天池遺跡）

【トリ】

縄文時代後期初頭（約4,000年前）に、深鉢形土器の口縁に鳥頭形の突起が付くものがあります。栃木県では那須塩原市槻沢遺跡のようなヘビやカエルにも見えるものや、クチバシが鋭いワシタカ科を模したものが多くみられます。壬生町八剣遺跡のものは、背にヘビが貼り付いている珍しい例です。

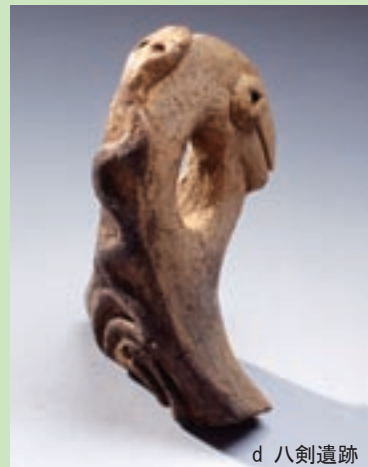


a 槻沢遺跡



b 槻沢遺跡

c 多摩ニュータウン遺跡 No. 920 遺跡（東京都）



d 八剣遺跡

10 鳥頭形突起の付いた土器

埋蔵文化財活用のための基礎講座

8月18～20日の3日間、「ふるさとの歴史を調べる」というテーマで、実施しました。この講座は、私たちの暮らす地域で生活した人々の歴史や文化を理解するうえで、大切な資料であり、生きた教材である埋蔵文化財を学校教育や生涯学習の場で積極的に活用していただき、多くの人たちに地域の歴史や文化に触れてもらい、よりいっそうの理解を深めていただくことを目的としています。特別講義や時代概説の講義と共に、史跡見学、発掘調査体験、石器作りも行いました。



講義のようす



宇都宮市飛山城跡の見学



石器づくり



発掘体験のようす

埋蔵文化財センター普及事業の紹介

埋蔵文化財センターの見学や、勾玉作りなどの体験学習を受け入れています。また職員が学校に出向いての「出前授業」も行っています。本物の土器や石器に触れるはじめての体験となった子供も多かったようです。



土器にさわろう !!



佐野市立南中学校の出前授業

埋蔵文化財センターの見学・体験学習・職場体験等のお申し込みは
ホームページ <http://www.maibun.or.jp> をご覧のうえ普及事業担当まで TEL 0285-44-8441